

JFFID 女子日本代表

UAE 女子チームとの交流親善試合 報告

報告者: (特非)日本知的障がい者サッカー連盟(JFFID)
女子委員会 女子日本代表監督 稲葉政行

日時: 2023年1月22日(日)~25日(水)
会場: 高円宮記念 JFA 夢フィールド(千葉県千葉市)

概要

本プログラムは、一般財団法人国際協力センター（JICE）が実施する「アラブ首長国連邦における教育及び人材育成に係る諸活動」における女性エンパワーメント事業として行う。UAE 側の強いニーズを受け、スペシャルオリンピックス UAE 女子ユニファイドフットボールチーム（The Unified Special Olympics UAE's Women Football Team）を日本に招へいし、日本チームとの交流、親善試合等を行う訪日プログラムである。本プログラムを通じて、両国の女性の活躍を支援し、両国間の関係強化を図るとともに、障がい者サッカー、ユニファイドフットボールの技術面の向上、SDGsの目標10にある平等な社会の実現に貢献する事を目指す。

UAE 女子スペシャルオリンピックスチームとの対戦は、知的障がいのある選手4名（アスリート）と知的障がいのない選手3名（パートナー）を基本としたユニファイドフットボール2試合、知的障がい者同士の試合1試合を実施した。

ゲームコンセプト【ミドルサードの守備から、サイドで奪ってショートカウンター】

日本代表としての一体感、責任感、感謝、夢と誇り、全力でサッカーを楽しむ気持ちを持ちつつ、2回の練習会で積み上げたコンセプトを落とし込み、ゲームを行う。

具体的には、スペシャルオリンピックスルールにはオフサイドがないため、コンセプトとしては、ボールを中心としたコンパクトな守備陣形（前に運ばせない・中央を突破されない）から1列目で制限をかけ、2列目・3列目でサイドに誘導して奪ったボールを、我々は逆に相手の守備陣形が整う前にまずはショートカウンターからの中央突破、中央を固められたらサイド攻撃も組み合わせる。サイドで奪いきれない場合はGKと連携してDFラインの背後をケアしつつ、ディレイして帰陣（プレスバック）、ゴールを守る数的優位を作ってから粘り強く奪う。GKについては、DFの背後のスペースをケアし、スーパー的な役割も基本コンセプトとし、ユニファイドフットボールのゴールクリアランスを覚えることも目的とする。

アスリートとパートナーの融合を図り、一体感を高め、合宿を通して選手同士の関係も強固にしていく。

スケジュール

【1月22日（日）】

- ①集合、抗原検査
- ②昼食
- ③ガイダンス
 - ・施設利用の手引き
 - ・コンセプトの確認
- ④トレーニング「オープニングトレーニング」
 - ・アイスブレイク
 - ・ジェフユナイテッド市原・千葉U-15との合同トレーニング



⑤オープニングミーティング (合同)

- ・関係者スピーチ
- ・両国監督スピーチ
- ・記念撮影

【1月23日 (月)】

①トレーニング「コンセプトの落とし込み」

- ・アップ「ストレッチ」「ステップワーク (ジャンプ、バックステップ、バックラン)」
- ・TR1 「2vs2+2 サーバー」
- ・TR2 「3+1vs1+2+GK」
- ・ゲーム 「5vs5+2GK (1-2-2-1)」
- ・セットプレー
- GK 「プレジャンプ」「基本姿勢」「キャッチング」「ポジショニング」

②UAE チーム (スペシャルオリンピックス UAE ユニファイドフットボールチーム) vs 日本チーム

- ・20分ハーフの7人制
- ・9-0 (5-0、4-0)
- ・得点者 (鈴木3、櫻本2、常葉、村岡、井上、工藤)

③スタッフセッション意見交換会

- ・両国の知的障がい者サッカー女子の歴史 (監督からのプレゼン)
- ・これからについてディスカッション
- ・記念撮影



【1月24日 (火)】

①合同アクティビティ

- ・アイスブレイク
- ・ごちゃまぜPK合戦

②「UAE チーム (知的障がい者チーム) vs 日本チーム」

- ・15分ハーフの5人制
- ・9-0 (5-0、4-0)
- ・得点者 (新田4、常葉2、村岡、後藤、工藤)



【1月25日（水）】

①トレーニング「コンセプトの改善」

- ・アップ「ストレッチ」「ステップワーク（ジャンプ、バックステップ、バックラン）」
- ・ゲーム「5vs5+2GK（1-2-2-1）」
- ・セットプレー

GK 「プレジャンプ」「基本姿勢」「キャッチング」「ポジショニング」

②UAE チーム（スペシャルオリンピックス UAE ユニファイドフットボールチーム） vs 日本チーム

- ・20分ハーフの7人制
- ・3-1（0-1、3-0）
- ・得点者（井上、村岡、櫻本）



③クロージング

- ・来賓あいさつ
- ・記念撮影

④着替え、抗原検査

⑤ミーティング

⑥解散



大会総括

【交流親善試合までの間のトレーニング】

- ・1月8日（日）の第2回トレーニングから、22日（日）までの2週間の間にパートナー選手によるZoomトレーニングを2回実施した。また、ATより配布されたチェックシートを毎日記入するようにし、セルフチェックを行った。22日の集合時には、全選手からシートが提出され、日々の取り組みが確認できた。
- ・今回で分かった点は、合間の期間を選手任せにせず、選手が自主的に取り組める内容のものを間のトレーニングとして、スタッフが意識的に投げかけていくことの重要性である。積極的にアクションを起こしてくれたパートナー選手、自主的に参加してくれたアスリート選手に感謝したい。
- ・また、急きょパートナー選手の交代があったが、両者の引き継ぎもよく、スタッフ全員で検討・納得して対応できた。今回参加できなかったパートナー選手も含め全員がチームの一員としてお互いをリスペクトし、高いモチベーションを維持できたことは準備として大きかった。

【全般として】

スペシャルオリンピックス UAE 女子ユニファイドフットボールチームの来日に際し、14つ目のカテゴリーとして、知的障がい者サッカー女子日本代表を結成した。国内でも2018年度から女子の取り組みがスタート、コロナ禍の中断を挟んで4年目というタイミングで、丁度6月に全国から選手を集めてナショナルトレセンを実施した後の9月にお話をいただき、ナショナルトレセン召集選手から更に10名に絞りこんだ。限られた準備期間でもあったため、テクニックの部分はもちろんのこと、既にグループ・チームとしてある程度機能できること、3泊4日という期間を比較的安定したメンタルで過ごせることも選考の基準とした。このタイミングで、海外チームと対戦できる機会を与えられたことには、不安よりも喜びの方が大きく、(一財)日本国際協力センター(JICE)、(公財)スペシャルオリンピックス日本(SON)の各団体と連携させて頂きながら、準備を進めてきた。会場については、(公財)日本サッカー協会(JFA)、(一社)日本障がい者サッカー連盟の皆様(JIFF)にもご支援いただき、何とかJFA夢フィールドを使わせていただけたこととなった。

今回採用される、ユニファイドフットボールルールは、大きくサッカーと大きく違う点としては、①オフサイドがないこと、②すべて間接フリーキックになること、③GKはキャッチしたらすべてスローで再開すること等があり、選手に新たに適応させることが多く、特に①オフサイドがないことへの適応に時間を要した。また、ユニファイドルールとして知的障がいを持たない選手(パートナー)と知的障がい選手(アスリート)との組み合わせになるので、高い競技レベルで選手歴のあるスタッフをパートナーとして採用し、事前練習会および現地入りしてからのトレーニングでチームへの融合を図ってきた。日本チームのパートナー選手は、全員Lリーグ・なでしこリーグ以上の選手であり(代表歴のある選手もおり)、ピッチ上でもアスリート選手の良き手本となり、プレーの基準を示していた。

日本チームの具体的なコンセプトとしては、ボールを中心とした守備陣形(前に運ばせない・中央突破されない)から1列目でサイドに誘導して2列目3列目で奪ったボールを、我々は逆に相手の守備陣形が整う前にショートカウンターからの中央突破、中央を固められたらサイド攻撃・チェンジサイドも組み合わせるようにプレーモデルを考えた。また、サイドで奪いきれない場合は、DFとGKで最終ラインの背後をケアしつつディレイして帰陣(プレスバック)、コンパクトを保ちゴールを守る数的優位を作ってから粘り強く奪い、ビルドアップしてゴールを目指すこともオプションとして共有した。

22日(日)の合宿初日は、アイスブレイクの後、ジェフユナイテッド市原・千葉レディースU-15さんとの合同トレーニングを実施させて頂けたことで、合宿スタートから高い強度のプレーを体感できたことはチームにとって良い刺激となった。貴重な機会を作って頂け感謝したい。

1試合目(23日)と3試合目(25日)は、ユニファイドフットボールによる7人制20分ハーフマッチ、2試合目(24日)はアスリート(知的障がいのある選手)のみの5人制15分ハーフマッチを実施した。1試合目と2試合目は共に日本ペースのサッカーとなり、1試合目は両チームともアスリート4選手+パートナー3選手の組み合わせとなった。日本チームがアスリート選手とパートナー選手の融合を図っていたのに対し、UAEチームのパートナー選手は、アンダーカテゴリーのUAE代表(U-17代表)から更に選抜された選手であり、テクニックとスピード、速さとゲームを観る目を持っていたので、良い意味でアスリート選手をリードしていた。3試合目

は、UAE チームがパートナー4 選手での申し出があり、日本チームはそれを受け入れパートナー2 選手でゲームをスタートした。UAE チームも日本の対策を立て、GK を含めた正確なビルドアップからワイドで縦に速い攻撃を仕掛け、この試合が一番強度の高い予想通り拮抗した激しい好ゲームとなった。序盤は日本チームの方が多くのチャンスを作ったが、徐々に UAE チームが押し返し、一瞬でサイドを起点に突破され 1 点を先制される苦しい展開となった。後半は UAE チームのビルドアップに対して、MF が縦にスライドし高い位置からプレスをかけることで奪いきることができ、逆転して勝利することができた。UAE の素晴らしい拮抗したゲームにより、日本選手は困難に立ち向かい最終戦を戦え、大きな財産となった。大寒波の中、来日してくれた UAE チームの選手・関係者に心より感謝したい。また、合宿を通し、オンザピッチ、オフザピッチの両面に関して、アスリートとパートナーによる選手ミーティングが自主的に行われた。更には、選手ミーティング内容を選手全員の判断でスタッフに報告するなど、短期間で成熟した選手集団が形成されていることを感じた。ピッチで闘うのはあくまで選手である。ゲーム改善もハーフタイムの選手同士の力によるところが大きく、選手の一体感とまとまりも大きな勝因となったと思う。素晴らしい選手に感謝したい。

また、スタッフのリレーションシップ・連携能力も高く、ゲーム分析力・プログラム立案等の実践力はもちろん、お互いに気付かないところをカバーしあうことができた。各スタッフの気付きにより、選手へのアプローチも多面的となり、選手個々の内面への働きかけ（メンタル面のフォロー）についても、取りこぼすことがなかった。パフォーマンス改善だけでなく、女子選手に対しては、メンタル面のケアとフォロー、ある程度納得させられる対話力と距離感も必要であると感じた。日を追うごとに全選手が改善され、良い選手と良いスタッフの力の結集した結果といえる。スタッフの献身的なハードワークに感謝したい。

UAE チームの全選手は、常に全力で闘うプレーを志向し、1vs1 の局面では、スピード、パワー、体格（手足の長さ・コンタクトの強さ）で圧倒される場面もあり、体感した基準を世界スタンダードとし、それを上回るアスリートとしての身体能力とメンタリティー、高い技術と早い判断ができる個の育成に取り組みたい。

オフザピッチプログラムでは、セレモニー（オープニングミーティング、クロージング等）や合同プログラムなどの場面で、同じサッカーファミリーとして、外国選手とも堂々と交流できるコミュニケーション能力も要求される。自分を表現できる力と共に、マナー面など大人としての立ち振る舞いを体験できたことも大きな経験だった。日本チームのどの選手もフレンドリーな雰囲気でも UAE チームとの交流を楽しんでいた。

最後に、交流親善マッチ開催にあたり多くのご声援とご支援をいただき、選手が全力を出し切るための大きな力をいただいた。今回の交流親善試合にあたっては、高円宮記念 JFA 夢フィールドを使用させていただいた。フル代表始め各カテゴリー代表の拠点となる素晴らしい施設を使わせて頂き、選手たちは高いモチベーションを持って闘うことができた。JFA の佐々木則夫女子委員長始め JFA の皆様、JIFF の北澤豪会長始め JIFF の皆様、47FA 関係者の皆様始め、各 FID 関係者も多くの方々にご視察とご声援にお越しいただけた。

運営の皆様、審判員の皆様、運営・通訳ボランティアの皆様、JFA 夢フィールドの皆様、ホテルグリーンタワー幕張の皆様には、大会を支えて頂き感謝したい。

本交流親善試合に関わっていただいたすべてのサッカーを愛する皆様にご感謝申し上げます。

【コンディショニング】

・腰部から股関節にかけての筋の柔軟性低下、体重のコントロールは、怪我・スポーツ障害の予防改善のために重点課題として取り組んできたが、回数を重ねるごとに改善され、怪我が少なくなっている。また、20 分ハーフのゲームであれば、十分に闘えるだけのフィジカルも身につけてきている。

・事前練習 2 回を含む、今回の 3 泊 4 日の合宿を通して、選手のパフォーマンス・フィジカル・代表へのモチベーションは格段に向上した。これを日常的に継続できる環境が不可欠であり、今回感じたことが日常になるように、全国に発信していかなければならないことを実感した。

【コロナ対策】

- ① 健康状態の把握（起床体温チェックは 2 週間前から）
- ② 集合・解散時・体温チェック、全選手・スタッフ抗原検査実施、全員の陰性確認
- ③ 終了後 2 日間の体調チェック、風邪症状の報告なし

今後に向けて

【各地域への落とし込み ～選手育成～】

- ・30分ハーフ（60分ゲーム）を実現できるフィジカル
- ・2vs2～3vs3の攻守におけるON・OFFの理解（代表では5vs5～をスタンダードとしたい）
- ・自分をしっかりと表現できるコミュニケーション力（オープンマインド）
- ・生活面を含むオフザピッチを強化する意味でも、宿泊を伴う地域トレセンの実施
- ・各地域での女子選手を指導できる指導者の養成

【各地域への落とし込み ～普及実現への連携～】

- ・サッカー教室、なでしこひろば等の普及活動の拡大
- ・各カテゴリー（障がい者カテゴリーだけでなく、FAと連動した4種～1種・女子・なでしこ・WEとのコラボ）との連携強化。イベントだけでなく継続的な取り組みへ。

【なでしこらしいサッカーを！】

- ・ひたむき、芯が強い、明るい、礼儀正しい、なでしこらしい選手になろう
- ・日本代表として、一体感、責任感、感謝、夢と誇り、全力でサッカーを楽しむ気持ちを持つ
- ・すべてのカテゴリーに繋がるJAPAN'S WAYの実現を

さいごに

今回女子代表チームの活動を始動できた事に対し、ご尽力をいただきました関係の皆様、厚く御礼申し上げます。特に主催として準備・企画からご支援いただきました（一財）日本国際協力センター（JICE）の大前様始めJICEの皆様、アドバイザーとしてご協力いただいた（公財）スペシャルオリムピクス日本（SON）の岩沼様、関様始めSONの皆様には格別のご厚意を賜り、選手が全力でサッカーをさせて頂きました。この場をお借りして感謝と御礼を申し上げます。

全選手とも、今回の代表活動に参加し、世界との距離感を感じ、大きく成長しました。特に、オフザピッチの意識の面では格段の進歩を見せ、感謝と、誇り、責任感、覚悟を持って全力でサッカーを楽しみ、プレーしようとしています。彼女たちの心の灯をともし続け、消さないようにしていかなければなりません。私達代表スタッフも将来性のある素晴らしい選手と共に大きな刺激と学びを得ましたが、代表として活動する喜びとともに、一方で世界に出ていくための課題も感じました。大きく成長しつつある選手のために、活動拠点となる器の整備、選手の情熱を受け止めることのできる指導者の養成に着手しなければ未来はありません。女子委員会としても、今回の代表活動からビジョンを見直し、各地域にどのようにアクションを起こしていくべきか、検討し直したいと思います。

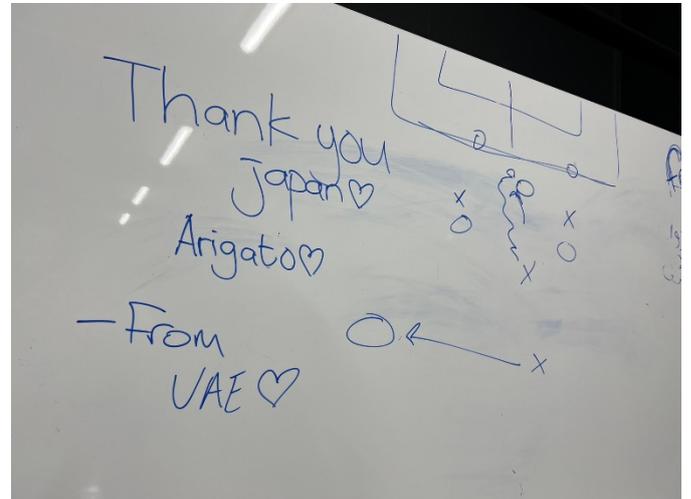
選手を派遣して頂きました各都道府県連盟の皆様、選手・スタッフの勤務先および所属チームの皆様、支援者・保護者の皆様には、事前連絡を含めたサポート等のご尽力により、無事に終了できましたことを感謝致します。各都道府県の指導者の皆様のご指導のおかげで質の高い選手が育ってきていることが実感でき、大変嬉しく思います。今回の代表選手以外にもよい選手はまだ各地に存在しています。どうぞ引き続き、各地域、各都道府県の関係者の皆様、女子委員会に対するご支援・ご協力・ご指導を何卒お願い致します。

開催に際し、関わっていただいた皆様、サッカーを愛するすべての皆様に、代表スタッフ一同、心より感謝と御礼申し上げます。

女子日本代表選手・スタッフ一覧

以下、ポジション、氏名、出身地

GK	山口 加純	(静岡県)
	山下 莉奈	(静岡県)
DF	山下 七海	(静岡県)
	石橋 ルカ	(愛知県)
DF/MF	後藤 千尋	(岐阜県)
	工藤 彩華	(栃木県)
MF	常葉 佳也子	(静岡県)
MF/FW	新田 里緒	(神奈川県)
FW	鈴木 理恵	(神奈川県)
	村岡 愛美	(宮城県)



監督 稲葉 政行 (神奈川県)

GK コーチ 星野 あかり (千葉県)

AT 野地 吾希夫 (神奈川県)

主務 長田 菜美子 (神奈川県)

コーチ 井上 由惟子 (千葉県) パートナー (ロールモデル)

コーチ 繁浪 由希 (千葉県) パートナー (ロールモデル)

コーチ 百地 万里江 (三重県) パートナー (ロールモデル)

コーチ 櫻本 尚子 (千葉県) パートナー (ロールモデル)

